

『思想の身体 声の巻』

真鍋 昌賢

本シリーズが関心を寄せる「思想」とは、一

部の特権的な知識人が抽象的な「概念的思考」
によってまとめあげた思惟の結果ではない(ii)、
以下同様にカッコ内は頁数を示す)。むしろ、
身体という物質をもった人間の日常の実践と
深くかかわった想像力のあり方といったほう
がいいだろう。「思想の身体」ということばに
こめられているのは、思想がどのように身体を
理解するのかという問いのみならず、身体はど
のように思想を規定しているのかという問い
でもある。「思想の身体」というコンセプトの
もとに「声」を論じようとするときに、不可避
な要素として浮上するのは、まさに感性や体験
などといった人間の実存にまわりつくキー
ワードであるだろう。以下では、編者である兵
藤裕己自身がかわる部分(第一章 鼎談)と
他の著者の執筆部分に大別して概要を紹介し、
そののちに今後の口承文芸研究が本書から何
を引き出すべきなのかについて考えてみるこ

とにしよう。

兵藤裕己「声と知の往還―音声中心主義は形
而上学か?」(第一章)は、本書の編集方針を
提示する論説である。兵藤は、「声に出して読
みたい日本語」(齋藤孝)などに代表されるよ
うな、「文化的ファンダメンタリズム」の現れ
とも解釈できる日本語ブームを引き合いに出
しながら、「声」を「アタマ」ではなくて「身体」
の問題として設定しようとする。そしてまた、
「文化的な共同性や帰属意識」が「身体的なも
のに根ざしている」ことの注意もうながしてい
る(五七七)。

そもそも声の身体性への関心は、近年に急
におこったことではない。兵藤が紹介するの
は、一九六〇年代末に演劇界で試みられて、
一九七〇年代以降、国語教育界で取り組まれて
きた「群読」である。齋藤孝の啓蒙的な活動は、
この方法の延長線上に位置づけられる。「群読」
は、しばしば参加者の感動を生む。その感動と

は「日常の自分を越えたある大きな力に包摂さ
れるような快感」(一一三)である。兵藤が「群読」
に適した文章としてあげているのが、「平家物語」
の原文だ。その文章が語り手・聴き手(社
会)によって共有され成句・成語を軸として
語られていくことにより、「あるファミリアー
な感性の共同体」がつくられていくのだとい
(一九)。語り手(書き手)は、「日常的・個的
な主体からある公共的な主体へと転移する」の
である(二四)。

兵藤がこうした『平家物語』の文章と対象さ
せるのは、明治期以降の言文一致体である。「自
分のことば」で「自分の考え」を表現する文章
が「自分」を成立させる。こうした思想は、近
代日本におけるロゴス中心的なイデオロギー
を支えてきたといってもいい(三三)。近代以
降に位置する「私たち」は、「自分」を超えた
「神仏」とか「運命」といった「超越的」な主
体に同調する感受性を失っている**と**兵藤は述
べる(三四)。「超越的」な語りの位置は、現代
語訳するのも難しいのだという(三六)。

本章で一貫して述べられているのは、「声」
を「わたし」をこえる共同性、あるいは定型
的な表現によって表現される主体、という点から
理解し、前近代における「声」のあり方が、近

代以降の表現のあり方を批判的に検討するた
めに重要だという点である。兵藤にとつて、「声」
を身体論として問題にすることの意味は、ヨー
ロッパ近代そのものの相対化と深く関連して
いるのである。

こうした兵藤のコンセプトを担保するべく
配置されているのが、「鼎談 声の可能性」で
ある。兵藤そして川田順造・鎌田東二によつ
て、デイシプリンをまたぐ課題として「声」を
議論するための切り口について、言葉がかわさ
れていく。この鼎談は、その問題群を、「近代
(ないしはポスト近代)的な偏向」を回避しな
がら、「可能な限りインテレクチュアルに見定
める」ためのナビゲーションであり、そこに
は「近代／ポスト近代というパラダイムその
ものを超えて、「声」について議論する可能性」
を見いだしたいという望みがこめられている
(二〇〇)。霊的な身体性をもった器官としての
耳(聴覚)、声を発する身体の構造、太鼓言葉
の追求から見いだされた言葉と身体の連鎖、ロ
ゴスの「無化」ともいえる踊りへの没入、シャ
ーマニズムの身体と声、ニーチェの集団的オル
ギーへの注目、近代的な行爲としての現代詩朗
読など、トピックが縦横無尽にとりあげられ
るなかで、読者は興味深い鼎談のなかに引き込ま

れていくだろう。

なかでも説得的であったのは、川田による次
の二点の指摘である。ひとつは、デリダのエク
リチュール論の相対化についてである。それら
は、西アフリカの非文字社会での事例(太鼓言
葉)、つまり非西欧社会でのフィールドワーク
のなかで得た知見に基づいている。川田は人間
が世界を理解するやり方として「閉鎖系として
の原子論」と「身体というものを認識の核と見
る、開放系の考え方」を挙げ、後者こそが、デ
リダのロゴサントリズムを批判的に見るため
の視点であるという。漢字やアフリカの図像は、
その意味において「開放系のエクリチュール」
といえるのだ(二三三―二三四)。もうひとつ
は、川田による声にならない声についての指摘
である。「本当に切実な体験というのは、自分
の声で語ることができないというパラドック
ス」をとりあげて、スピヴァクに言及しながら、
「一番抑圧された人」は発する声をもつのかと
いう問いを立てている。川田は、この問いをふ
まえて、声の生理的なレベルでの問題から、「声
で語る」ということが持っている社会的な位置
づけの問題」に踏み込む必要性を指摘している
(二四五)。声の身体性ととも、それと不可分
に絡み合う声の社会性を視野に入れることを

明確にうながしているとと言えるだろう。

兵藤・川田・鎌田による言葉のやりとりのな
かには、フィールドをこえて、また文学・人類学・
宗教学という枠をこえて、まさに身体から逃れ
ることができない声または思想を、人間にとつ
て根元的かつ切実なレベルからとらえ返すた
めのきっかけがちりばめられていると言える
だろう。

他の論説(二章―六章)では、それとゆるや
かに関連しつつ、各テーマのなかで声につい
て論じている。鈴木英夫「自然と声」(第二章)
では、人間の声を自然と文化の境界に位置づけ
て、文学作品などを引き合いに出しながら声の
特徴を論じようとしている。声を発することそ
のものが人間らしさを根拠づけるのではない。
「言語」知性」を獲得した人間にとつて、声は
それを現象させる手段であると同時に、「原始
的自然」を呼び起こすような「混沌状態」を用
意する過程をも用意する(五三三)。鈴木は、コ
ミュニケーションと対比して、コミュニケーション
の重要性を説く(五九―六一)。その重要性とは、
コミュニケーションの伝達モデルでは見失つ
てしまふ、自己と他者の区別が消滅する主客一
体の様相に他ならない。また鈴木は、人間の個
別性を超えたところにある「生物的な普遍性」

と人間という範疇における「靈性」(「宗教心」、あるいは「自然に対する畏敬の念」という「普遍性」)によって支えられている「共鳴」への注目をうながしている(六四一―六五)。

樋口覚「日清戦争と近代日本の軍楽隊」(鄙びたる軍学の憶ひ(中原中也)「第三章」)では、明治期における軍楽隊の黎明について述べたのちに、日清戦争の英雄となった原田重吉が、軍神化されたのちに、「没落」していく様をとりあげていく。樋口は、原田を日清戦争という近代戦争の「悲劇」を体現した人物として位置づけ、昭和期に入って萩原朔太郎によって書かれた『日清戦争異聞』を、原田を通してみた「近代日本批判」として評価している(九四)。「戦争にまつわる表象のなかで軍神がまつりあげられ、国民の物語が共有されていく過程を論じる際に、原田は興味深い存在である。近代日本における戦時下の気分をつくりだしていく声と音に近づこうと、軍神の表象は重要な素材であるだろう。

阿部泰郎「儀礼の声―念仏の声をめぐりて」(第四章)では、仏教儀礼の時空をつくる中心的な手段としての声をとりあげている。声の技は仏事・法会に現前し「常に人の身体を介して実践」されるのだ(二〇)。前半では天台宗

などをとりあげるなかで、声の力を理論化しようとした諸相が、「講式」の詳細な紹介によって論じられている。後半では、中世における「声としての念仏」を取り上げている。法然を中心として、阿部は、まさに「声の領域において端的にあらわれ」ている(一一三)。「高声」と「一声」に焦点化することで、阿部は声あるいは踊りが中世の念仏の核であったことを論じる。また阿部は、親鸞以降の浄土真宗における声明の体系化を取り上げ、現在にまで続くその歴史的な厚みを紹介している。阿部が記述するのは前近代の仏教において人身を掌握する手段としての声が錬磨されてきた歴史である。それは近代で分離されてきた宗教と芸術を再縫合するような声のあり方を端的に示していると言えるだろう。本章では、仏教の世界観が、抽象的観念的なレベルでなく、声によって具現化し、思想と成り得ていることが詳細に論じられている。

沖本幸子「芸能の声―遊女をめぐって」(第五章)では、平安時代の若い女性の声に焦点を合わせて声の身体性について論じている。平安時代の貴族にとって、「可能な限り「生身」を隠蔽する」ことが「尊く美しいあり方」であったなかで、声は「生身」を露呈させてしまう

存在であり、特に若い貴族の女性にとって歌うことはタブーであったという(一三七)。すなわち歌う女性(「歌女・遊女」)の「声技」はエロスにつながっていたのだという(一四三―一四六)。さらに沖本は、音色を評価する際の「すみのぼる」という言葉に注目し、美声が神仏と交感する手段であり、さらに死を招くとも考えられていたことを論じている。つまり美声ゆえに、遊女は「タブーを超越する存在」(二六一)であった。沖本は芸能者がどのように感受されたのかに着目することで、声のテクスチャーを、巧みに史料からうかがいあがらせている。

坪井秀人「電話する女」の声(第六章)では、本書のなかで複製された声を扱った唯一の論考である。現代では電話は親密かつ閉じられた一対一の空間と了解されているが、交換手が活躍していた時代はそうではなかった。坪井はまず、ジャン・コクトーの『人間の声』を基点とし、その変奏であるロッゼリーニの映画版、プーランクのモノオペラ版、さらにコクトーを意識して書かれたと思われるメノッティのオペラ『電話』を対照させて、距離の縮減を夢見たはずの電話がかかえるデイスコミュニケーションのアイロニーを描き出す。さらに坪井は電話交換手の存在に焦点を合わせ、声のジェンダー化に

ついで論じている。坪井は、近代における声と複製の關係すら、現在の自明性をとりはらつて想像／考察する必要があることを示しているといえるだろう。

以上が、本書のエッセンスの紹介である。第二章から六章の各論考は、一章・鼎談のコンセプトに収斂するというよりは、むしろ「声」というキーワードのもとに、みずからの研究領域から問題を立ち上げ、それにこだわる意義を讀者に気づかせることを主眼とした記述であるといつていいだろう。

帰属意識が身体的なものに根ざしていて、発話する／耳を傾ける主体が、個を超える共同性にいざなわれるというライトモチーフは、口承文芸研究にとつて、なじみにくいものではないだろう。むしろ、語りが何かしらの共同性に担保されているという考え方は、口承文芸を研究する根本的な意義に関わっているといつてもいい。しかしながら強調しておきたいのは、本書が、前近代的な共同性を追求することを無条件に肯定しているわけではないということだ。むしろ本書は、大きな物語を失つた社会が小さな物語に依拠しながら、グローバル化の波にのみこまれていく現在を、批判的に検討するきっかけが、生活に根ざした身体や声にあるのだとい

う呼びかけの書である。身体・声への注目意義がアカデミズムで、あるいはそれを凌駕する消費社会で、既に気づかれ、意識されていることをふまえて、「さあ口承文芸研究はどのように何を論じるの？」と問いかけられているように思われる。

では、口承文芸研究が本書から導き出すべき論点とは何か。個別のテーマについては、本書の各部分からひろいあげることができるだろうが、むしろ大切と思われるのは、口承文芸研究全体において共有されるべき論点とは何かということである。それは、ポストモダンの思想状況を批評する抽象度の高い議論と、事例分析（第二章から六章のような）を架橋するための結節点とも言えるだろう。

ひとつは、口承文芸研究が身体観（あるいは身体感覚）の変容をどのように論じられるのかという論点がまずあげられるだろう。メディアア史を補助線としながら蓄積されてきたうわさ研究は議論の場をひらく先達となりうるだろう。次に、近代における知識人と民衆（大衆）の關係を問ひ直す領域として「声」の思想史を設定していく方向性があるだろう。それは、「口承文芸」をまなざしてきた採集・研究の視線を、もう一度、身体をかかえた思想と実践の歴史と

して見だしていく方向性である。特集「声」の採集者列伝「聞き手たちの時代」（本誌三〇号）などはひとつの入り口になるのではないかと。そして三つ目は、おそらく最も重要な論点と見えるのだが、「声」の問題とは、はたして個か共同性かどちらか一方の文脈に帰属するものなのか、という問いの再設定であるように思う。文化のアクチュアルな生成を記述するうえで、「声」が重要なテーマであるとするならば、個と共同性の拮抗そのものを記述する方法論・文体とはどのようなものなのだろうか。本書はその指針までは与えていない。それは、讀者に投げかけられた課題である。身体の加重をかけられた「声」の矛盾に耳をすます作法とはどのように自覚されるべきなのだろうか。

『声の巻』は、「声」について思考する者の知的好奇心を刺激し続けるだろう。その点において、本書は、今後の口承文芸研究に欠かせない出発点になるのではないだろうか。

（二〇〇七年、本体二〇〇〇円、春秋社）
（まなべ・まさよし／大阪大学）